

「名前の由来」

恥ずかしいほど世論に疎い私も先月届いた「桐島聡」のニュースには、感慨深いものがありました。1975年、連続企業爆破事件の複数のテロ事件に関与し、指名手配されていた男が、神奈川県 of 病院で「桐島聡」と名乗り出たという話。

身元が特定される前に末期の胃がんで死亡しましたが、「最期は本名で迎えたかった」という言葉に驚きです。ちなみに親族はこの男の遺体を引き取ることを拒否しているそうです。「そりゃー、何を今さら身勝手な・・・」と思われて当然です。罪の重さ、被害者や親族にかけた迷惑は計り知れません。

ただ半世紀ほど逃げ回ったのですから、或る意味、完全犯罪のようなもので、そのまま逝ってしまう手もあったはず。なのに、最期の最期に名乗り出るとは、「名前」や「出自」が、それほど重たいものであるのかと、改めて考えさせられました。

そういえば我が家の認知症の母は、90歳になっても「実家に戻って、そこで暮らしたい」と時々こぼします。「今は空き家になっていて誰も住んでないよ」と説明してもウチがあきません。現地に連れて行っても、それすら忘れて同じことを繰り返し尋ねます。鮭が遡上するように、生まれたところに戻りたくないのでしょか？

親からもらう最初のプレゼントが肉体と言う名の「命」なら、名前は2番目のプレゼントと言っても差し支えないでしょう。私は子どもの頃から、幾度となく父親から名前の由来を語り続けられました。連載小説「竜馬がゆく」が完成した年に生まれたこと、丙午という干支だったこと、そして先祖が馬術の師範だったことだと。

もしかしたら大きな犯罪を犯さず生きているのは、こういう教育のお陰なのかもしれません。だとすれば、我が子たちにもしっかりその由来を伝えておかねばなりません。ちなみに我が家の子ども達2人には命を大切にしたいとの願いから「生」という字をつけています。そしてアルファベット表記した際に「i」で終わるように名付けています。「i」で終わる名前を呼ぶと口角が上がります。つまり皆が名前を笑顔で呼んでくれるようにとの思いからです。

一方、自分がもらった名前を大事にしているか？ 込められた願いを叶えないまでも、それを真剣に追っているか？ と問われるとどうでしょうか。余命幾ばくも無くなった時に焦らなくとも良いようにしたいものです。

アノ世には何も持っていけないからこそ、死ぬ時に自分を見つめ直すのだろうな、そんなことを考えさせられたニュースでした。